特集・横浜とワールドカップサッカー❻

◎横浜とスポーツ文化の振興

①市民と生涯スポーツ
②ワールドカップサッカーの開催とスポーツ文化の振興
③サッカー振興におけるサッカー協会の歴史と役割
④次世代のスポーツ環境～イギリスとの比較を通して

① 市民と生涯スポーツ

■鈴木英夫

1―はじめに
2―支える「モノ」
3―支える「ヒト」
4―これからの生涯スポーツの展開
5―むすび

1―はじめに

私たちは、自分の筋肉を収縮・弛緩させ、骨を巧みに操りながら動いている。そのことが、生存する上で必要な労働、戦い、宗教上の儀式、さらに、遊びの手段として行う人たちが楽しめる運動をつくりだした。

この運動は、スポーツという名で人々のなかで伝播していき、統一した規則や組織が確立され、設備を整合化しながら、健康・身体訓練・性格陶冶の価値が認識されるようになった。そして、このスポーツは、競技性と非競技性の性格をもちながら、「勝敗」と「健康」という二つの軸で、展開した。

スポーツの競技性は、近代オリンピックの標語「より速く、より高く、より強く」のように、勝利や記録をめざし、人間の能力の限界を追求し、他者より優れるための競技力向上というスポーツの高度化＝質的向上を求めてきた。一方、スポーツの非競技性は、生きがい・健康を軸に、スポーツを行うことの楽しさ・喜びを享受し、人間らしく人生の幸福を見いだすことを追求した。そこに、大衆化＝量的拡大を求め、生涯スポーツとして推進されてきた。

今日、スポーツは、一部の人たちに専有されていた時代から、多くの人たちにとって身近なものとなった。日常生活での衣・食・住のほかに、遊・楽・動が加わっている様相である。このような状況のなかで、スポーツの非競技性において、行うことの楽しさ・喜びを享受し、生きがいや健康を志向することは勿論のこと、競技性においても「勝敗」と「健康」という二つの軸が分離することなく、「勝敗」を求めながら「健康」を、「健康」を求めながら「勝敗」を志向するものとなり、生涯にわたるスポーツのあり方が問われるようになった。

そこで、この生涯にわたるスポーツ、生涯スポーツの振興が、人口三百四十万人の横浜という街で、どのようになっているのか、そして、将来に向かってのあり方について、「モノ」と「ヒト」を中心に考えてみたい。

2―支える「モノ」

昭和五十六年に、横浜市は、新たな市民的課題に対応しながら将来の時代を展望して、安全で快適な都市づくりを進めるために、新総合計画「よこはま21世紀プラン」を策定した。この計画のなかで、スポーツ・レクリエー

表―1　スポーツセンターの延べ利用者人数の年次推移

年度	館数	団体利用者	個人利用者	合計	団体数	1館当たり平均人数
1980	1	17,438	4,089	21,527	474	21,527.0
1981	1	80,774	16,695	97,469	2,148	97,469.0
1982	1	93,933	20,958	114,891	2,247	114,891.0
1983	2	148,399	53,167	201,556	3,850	100,778.0
1984	4	215,414	91,075	306,489	5,660	76,622.5
1985	6	293,661	146,626	440,287	7,819	73,381.2
1986	7	453,575	189,080	642,655	10,827	91,807.9
1987	8	539,125	222,729	761,854	13,286	95,231.8
1988	9	670,730	253,863	924,593	15,432	102,732.6
1989	10	1,001,069	284,251	1,285,320	20,570	128,532.0
1990	10	1,123,336	315,645	1,438,981	24,135	143,898.1
1991	11	1,299,836	417,262	1,717,098	29,195	156,099.8
1992	14	1,437,681	498,678	1,936,359	34,827	138,311.4
1993	15	1,679,365	527,321	2,206,686	40,865	147,112.4
1994	15	1,796,729	539,948	2,336,677	44,079	155,778.5
1995	16	1,869,273	562,071	2,431,344	47,748	151,959.0
1996	16	1,821,635	552,531	2,374,166	48,500	148,385.4
1997	17	1,697,874	605,613	2,303,487	49,389	135,499.2
1998	17	1,787,082	670,697	2,457,779	51,104	144,575.2
1999	17	1,826,845	727,869	2,554,714	52,489	150,277.3

資料）スポーツ振興事業団提供

ションの長期目標は、市民が身近に楽しむ日常的施設から国際競技会まで開催できる拠点的施設の整備、市民による指導体制の充実と活動の普及・促進、市民が気軽に参加できる多様な活動の機会提供であった。とくに、市総合計画の「一区一館構想」に基づき地域住民の生涯スポーツの拠点として、スポーツセンターが建設された。昭和五十五年に港南スポーツセンター、昭和五十八年に旭、昭和五十九年に戸塚、昭和六十年に港北、その後、金沢、緑、磯子、瀬谷、鶴見、保土ヶ谷、栄、中、泉、南、神奈川、青葉、西スポーツセンターがつくられ、現在までに十七のセンターが設置されている。地域の生涯スポーツの拠点としてのスポーツセンターは人々にどれだけ利用されているのだろうか。

表―1は、港南スポーツセンターが設置された昭和五十五年度から平成十一年度のスポーツセンター利用者の延べ人数である。当初、二万千五百二十七人の人数と四百七十四の団体数であったものが、平成十一年度には二百五十五万四千七百十四人で、団体数が五万二千四百八十九となっている。また、一館当たりの平均延べ利用者数では、昭和五十五年度が二万千五百二十七で、平成十一年度が十五万二百七十七・三であり、明らかにスポーツセンターの設置数にともない、利用者が増大しており、生涯スポーツの高まりが年次的に増加していることがわかる。

この利用状況の中で市民の利用の割合はどれくらいだろうか。図―1は、平成十一年四月から八月までの四ヵ月間にトレーニング室を利用した八千二十六人の実態である。これによれば、全利用者の九五％は横浜市民である。また、それぞれのスポーツセンターで見ると、市民利用が最も多いのは南の九八％少いのは栄の八八％であった。このように多くの市民がスポーツセンターを生涯スポーツの場として利用し、「一区一館構想」が実りあるものとなっている。

生涯スポーツを支える「モノ」として、スポーツセンター以外に昭和三十四年から始まった小・中学校の校庭・体育館を地域に開放する学校開放（平成十二年小学校三百四十八校、中学校百四十五校）と表―2に示すような六百十五の公共の施設がある。ただ、これらの施設だけでなく、生涯スポーツの展開は、市民の日常生活圏内の身近な場所、福祉施設、町内・自治会館、銀行、消防・警察署、寺社境内、道路などにも広がっている。さらに、横浜ジュニアスポーツアソシエイションが行った小学生と中学生に対するスポーツ活動の調査（平成十年）によれば、多くの子ども達が河川・山・海という自然のなかでの活動を望んでいた。このことから、生涯スポーツの「モノ」のとらえ方は、多面的に考えるべきである。

「モノ」を使う人たちは、女性から男性まで、子どもからお年寄りまで、障害を持った人から障害を持たない人まで、日本人だけでなく外国人まで、さまざまな人たちがいる。今後、スポーツ人口と実施頻度の増加にともない、「モノ」の不足から「モノ」の利用のしにくさをもたらし、継続的な活動が困難になることが予想される。市民のスポーツニーズに応えるための「モノ」に対する考え方や使いやすさを求めていくことが必要だ。

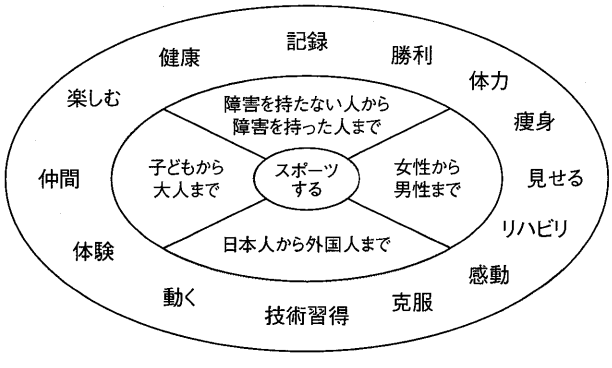
3　支える「ヒト」

スポーツをする人は、図―2にみられるような特定の目的をもってスポーツを行っている。この人たちを効率的・効果的に目的成就させるには、これを支援する他者とのかかわりの仕組みが整っていなければならない。それが「ヒト」の支えであり、とくに、指導者の存在である。

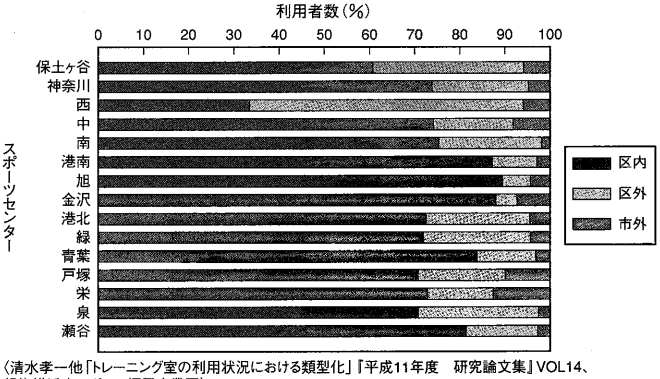
横浜市には、地域で生涯スポーツを支えている指導者として、スポーツセンターの指導員のほかに、①市民健康・体力づくり指導者養成講座修了者、②体育指導委員、③青少年指導員、④神奈川スポーツリーダー、⑤神奈川県スポーツ指導員、⑥野外活動指導者、⑦レクリエーション指導者、⑧カヌー指導者、⑨ボート（漕艇）指導者、⑩水泳（二種）指導員、⑪登山指導者、⑫健康体操推進員、⑬その他―種目競技指導者、ボランティア協会やレクリエーション協会の指導者がいる。これらの指導者数は、資格や団体が重複してその実数が定かでないが、筆者の調査（平成四年）によると、延べ九千七百三十人であった。現在もなお指導者の育成・向上のための講習会や研修会が行われている状況において、今後、量的な拡大は進むであろう。

横浜市では、前述の新総合計画「よこはま21世紀プラン」に基づき、「横浜市スポーツ振興調査会」を設置させ、「新しいスポーツ振興組織のあり方」と「新しい社会体育指導者養成事業のあり方」を調査・検討した。昭

図―2　スポーツの目的



図―1　トレーニング室利用者の居住地別人数（平成11年4月～8月）



〈清水孝一他「トレーニング室の利用状況における類型化」『平成11年度　研究論文集』VOL14、（財）横浜市スポーツ振興事業団〉

和五十八年三月、この調査会から教育委員会に対して、「横浜市におけるスポーツ振興への提言」が提出された。このなかで、「豊かな人間性に富み、種目志向のワクを越え、しかも普遍的な本市独自の社会体育指導者養成事業を図る」「総合的で多様なコースをもつ学校形式とし、そのための場を検討する」「既存の指導者の役割分担を明確化し、それらの資質の向上、並びに各指導者間の連携を図る」という三項目が提言された。

この提言を受けて、横浜市教育委員会は、昭和五十九年に設立した財団法人横浜市スポーツ振興事業団に対して、指導者養成事業を委託したのである。それが、昭和六十年に事業団によって、「スポーツ・レクリエーション活動を通じて市民の健康・体力づくりと交流を図るために、学校開放施設など身近な施設を活用し、種目志向を超えて、地域に根ざした生涯スポーツを推進する指導者を養成する」という目的で開催された「市民健康・体力づくり指導者養成講座」である。昭和六十年度から平成九年度までの修了生は七百五十五人であり、修了生は、表―3にみるように十八区に分布している。この修了生の実態調査（平成九年）によると、指導場所が幼稚園・学校、スポーツセンター、地区センターを主として、体操、エアロビクス、太極拳、ジャズダンス、卓球、テニス、バドミントンという種目を四十歳代から六十歳代の人たちを対象に二十人から五十人未満のグループで指導している傾向であった。この地域に根ざした生涯スポーツを推進する指導者の存在は、確かさをもって地域のなかで生涯スポーツが育まれていることがわかる。

また、スポーツ振興法に基づいて設置された体育指導委員は、「地域住民との連帯の中で地域に根ざしたスポーツ・レクリエーション振興事業の企画・立案・実施並びに普及活動」を目的に、生涯スポーツの推進の役割を果たしている。現在、横浜には二千七百七十八人の体育指導委員（第二十二期）がいて、町内会・自治会域だけの活動だけでなく、区域・市域にわたって活動を展開させている。事例ではあるが、ひとりの体育指導委員の十一ヵ月間での活動を調べてみると、クラブ指導・試合三十八日、会議・打ち合わせ会五十六日、研修会十九日、県・市催事十二日、町内会催事三十八日で、町内会等の活動日数は年間百六十三日に及ぶ。会社勤務や自営業を営みながらこのような地域に密着している体育指導委員の努力も生涯スポーツを振興する上で、大きな力となっている。

これら地域で活動している指導者は、種目や役割が異なっても私たちの身近に存在し、生涯スポーツを市民に提供していることは事実である。なお、指導者以外にも生涯スポーツを支える「ヒト」がいる。「ヒト」それぞれは、一般的知識・技術だけでなく、専門的知識・技術（医科学、法律、会計、語学、パソコンなど）も持っている。これらの能力を用いて、その活動のほとんどがボランティアであるが、スポーツのさまざまな場面（サークル・クラブの日々の練習、スポーツ教室、競技会、発表会など）で、案内、介添、相談、企画、運営、事務、診察、治療、調達、通訳、清掃、設営等の役割を果たし、生涯スポーツを支えていることも忘れてはならない。

4―これからの生涯スポーツの展開

「モノ」と「ヒト」は、生涯スポーツを推進する上で、大切であるが、これらが分離し、孤立していたら、機能的ではない。そのためには、合従・連衡の仕組みが作られる必要がある。「ヒト」と「ヒト」、「ヒト」と「モノ」、「モノ」と「モノ」が結びつけられ、ネットワーク化が図られ、情報流通されることである。施設を使用したい人たちと施設を使用してもらいたい人、指導をしたい人と指導を受けたい人、イベントに参加者を募集している人とイベントに参加したい人、施設の情報を発信したい人と施設の情報を受信したい人、このような供給と需要のバランスをとることと、情報を手軽に収集できることが必要である。横浜市スポーツ情報センターからの情報発信（人材派遣、施設等）や市民利用施設予約システムの「はまっこカード」方式が行われているが、市民が容易に情報を往来させるには、まだ十分な一元的な体制でない。宅配便などで行われている集積・配送のようなハブ・アンド・スポーク・システム（Hub and Spoke System）を横浜の情報流通として構築することが望まれる。

（財）神奈川県体育協会では、このハブ・アンド・スポーク・システムをメディカル・サービス・ステーション事業で試みている。最近の競技会やイベントでは、生涯スポーツの振興にともない、子どもから高齢の方までが参加するようになってきた。参加者は、

表―3　修了生の行政区別の居住地域
（昭和60年度～平成9年度）

行政区	男性	女性	合計
鶴見区	5	31	36
神奈川区	22	48	70
西区	6	12	18
中区	8	15	23
南区	6	29	35
港南区	17	48	65
保土ヶ谷区	7	27	34
旭区	17	49	66
磯子区	19	44	63
金沢区	14	52	66
港北区	12	29	41
緑区	12	38	50
青葉区	2	11	13
都筑区	0	3	3
戸塚区	7	47	54
栄区	7	24	31
泉区	3	13	16
瀬谷区	22	27	49
市外	7	15	22
合計	193	562	755

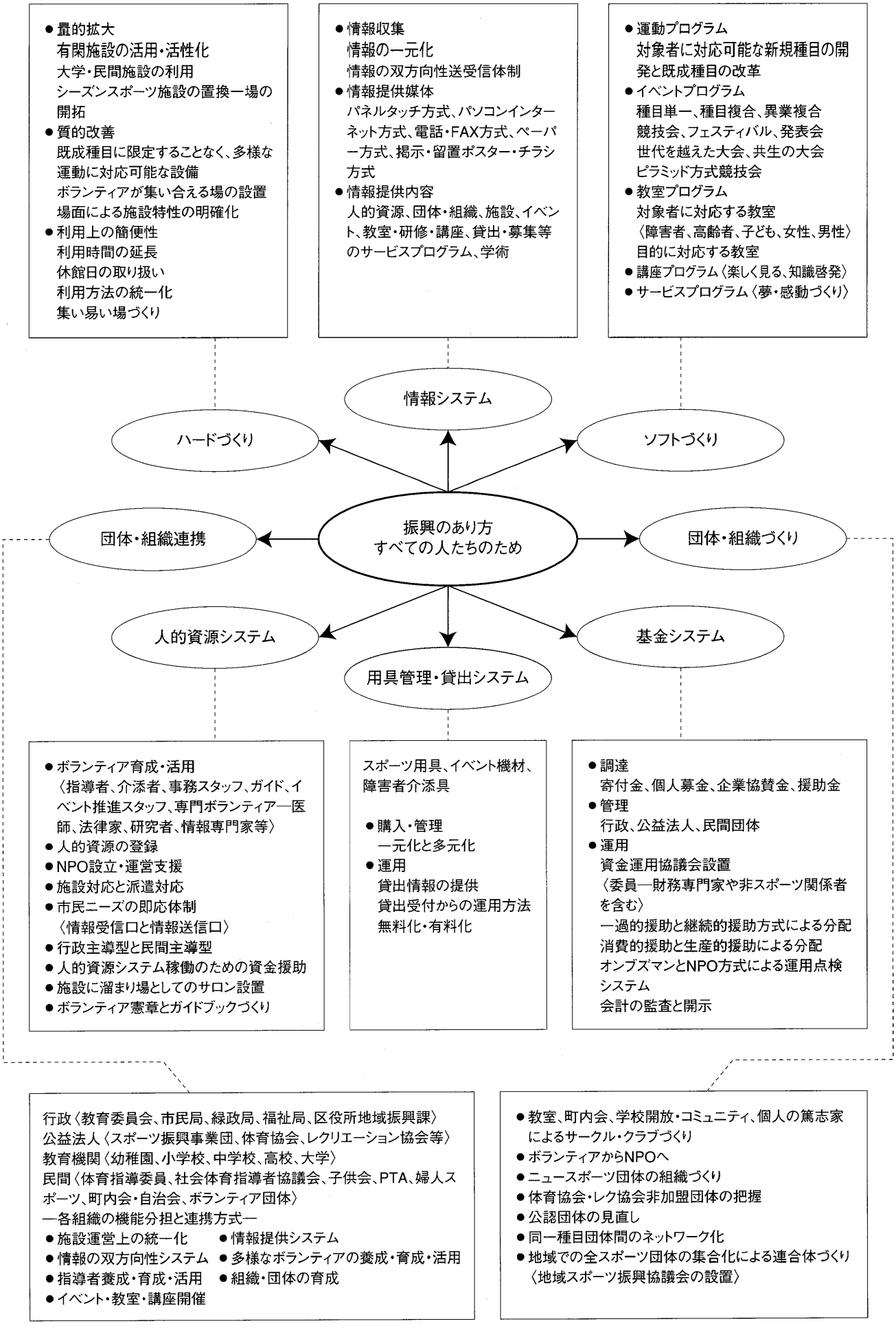
資料）スポーツ振興事業団提供

表―2　公共施設の実態

種別	件数
体育館	14
スポーツセンター	17
スポーツ会館	11
地区センター等の体育室	72
コミュニティハウス	74
トレーニング室	35
野球場＜少年含む＞	61
競技場＆球技場	4
広場	125
庭球場	55
屋内プール	23
屋外プール	62
キャンプ場	10
野外活動宿泊施設	4
こどもログハウス	18
その他	30
合計	615

資料）市教育委員会提供

図ー3 生涯スポーツ振興のあり方



自己の責任において体調を整えているが、それでも怪我・急死が発生する。主催者は、事故やアクシデント等に備えて救護室を設け、専門の医療従事者（医師、看護婦、トレーナー等）を常駐させている。しかし、通常、医療従事者の常駐は、人脈や金銭面等で、難しさがともなう。これを解決させようとしているのがメディカル・サービス・ステーション事業である。（財）神奈川県体育協会に医療従事者の派遣要請をすることで、協会内のスポーツ医学委員会トレーナー部会において、競技会やイベントでの参加者のコンディションや急性外傷・慢性障害・疾病に対処し、参加者が最高のパフォーマンスを発揮できるようにするための医科学サポートがうけられる。内容的には従来の救護室機能に加え、医師（内科医、整形外科医）がスポーツ医事相談に応じ、トレーナーがコンディショニングや慢性障害の処置を行うというものである。今回、筆者が代表として十一月五日に横浜文化体育館で行う「体操フェスティバルヨコハマ」という催しで、このメディカル・サービス・ステーションを開設する。是非、多くの人たちにこのステーションを見ていただき、今後のそれぞれの催しを行うときの参考にしていただければと思う。

スポーツの催しで、主催者が最も配慮するのが危険防止や安全確保、さらにはアクシデント発生時の対応であろう。この点の問題解決が図られ、円滑に行われることは、単に、スポーツの催しだけでなく、生涯スポーツの振興上、大きな力となる。ただ、生涯スポーツが展開するには、前述の医科学サポートだけでなく、総合的なサポートシステムを必要とする。図―3は生涯スポーツの振興のあり方を提示したものである。このなかで、とくに注目したいのがスポーツ・ボランティアである。横浜の生涯スポーツの現状は、このボランティアに支えられている部分が多い。そのため、ボランティアの人たちが安心して、活動を継続できる仕組みをつくるべきである。理論・実践講座による養成・育成づくり、ボランティアガイドブックづくり、ボランティアを救済するための人的支援や資金援助、保険制度・補償制度（ボランティア切符の発行）、ボランティアが集い合い・活動できるサロン的場の設置、人的ネットワーク化によるハブ・アンド・スポーク・システムの構築、個から組織づくり（ＮＰＯとしての確立）等をシステムとして考えることであろう。

なお、従来、スポーツをする人たちが施設や催しに集まり、そこで指導者等のボランティアの支援のもとで、活動が行われるという集中型が一般的であるが、生活の質が問われ、少子化・高齢化の状況にあって個に対応する必要が出てきている。そのために、個人や家族という単位に対応する分散型のボランティア活動も視野に入れる必要がある。

そして、これらのボランティアの人たちが、単に、スポーツの場面だけでなく、生活の場面へと活動の範囲が広がることが望ましい。生涯スポーツが、人間らしく人生の幸福を見いだすことを希求するならば、生活と結びついて展開すべきであろう。平成七年の阪神・淡路大震災では、全国から延べ百四十万人超のボランティアが被災者の救助―救護―自立に大きな役割を果たした。横浜でも市民がさまざまな困難に陥ったとき、スポーツ・ボランティアが速やかに対応できればと思う。

5―むすび

「モノ」と「ヒト」が組み合わされ、小さなスポーツの集いからマスコミが注目する大きな集いまでも含みながら、生涯スポーツが横浜の町内会・自治会域、学校域、区域、市域で行われ、人と地域を彩っている。

昭和五年、東京神田の万世橋警察署勤務の面高巡査が夏休み中の子ども達の過ごし方を心配し、神田和泉橋際の空き地に子ども達を集め、ラジオ体操（早起きラジオ体操会）を始めた。この面高巡査の心、子ども達を何とかしたいという心がラジオ体操と結びつき、地域での生涯スポーツの活動となっている。今日、生涯スポーツにかかわる人たちは、「誰かがしてくれるのでなく、自分は何ができるか」「自分が支えているのでなく、自分が支えられている」ことを問いながら、面高巡査の心と同じような心で、他者への思いやり、優しさ・穏やかさ・温もりを大切にしながら、人と地域のなかで活動している。

生涯スポーツが振興することで、人と人とのコミュニケーションと地域の活性化が図られ、子どもに夢を、お年寄りには生きがいをもたらし、住んでよかったと感じる豊かな横浜づくりが推進できるのではないだろうか。

＜横浜商科大学教授＞